

## 「子どもたちに自由なアートを」

香月 欣浩 \*

An art free to children

Yoshihiro Katsuki

本学の幼稚園でアートクラブという活動をおこなってきて4年目となります。1グループ15人で4回の活動をおこない、年間4グループ計16週の活動です。今年度は活動内容に自由度を増し、自分で決めていく要素（内容・材料・道具・方法）を増やしました。また作品主義ではなく経験主義である指導を前面に出して子どもたちに接してきました。

**Key words:** こどもの造形、自主性、自分で決める、楽しんで伸びる、発想力、創造力



発泡スチロールを力強く削る子ども

### <はじめに>

「美術が苦手な人？」と聞くと、半分以上の学生が手を上げます。これは短大に入学して間もない頃に美術授業で質問をした時の短大生の反応です。なぜ苦手と感じるのか理由を聞くと「絵が下手だから」「センスがないから」という答えが多く返ってきます。では絵の上手下手とかセンスの有無は誰が決めるのでしょうか？それは自分自身です。他

人がどう言おうと、どう評価しようと自分の納得の行く表現をすることが絶対に必要なのです。そのためには、することは自分で決め、道具や材料も自分で選び、やり方や進め方も自分の思った通りにする。そして自分の納得いくところまで表現ができれば、終わりも自分で決める。そんな造形表現が保育現場でできる方法論を四條畷学園大学附属幼稚園アートクラブでの実践を元に考えていこうと思います。

\* 四條畷学園短期大学 保育学科

## 1. 子どもの造形表現力

※子どもの造形的表現力とは、単にものを上手に作るなどの技術的な問題に終わるのではなく、子ども自身が生き生きとした生活経験を送り、充実した生活からあふれる感動を造形として表現でき、子ども自身が創る喜びから創造力を高め、かつ伸ばすことによって自己の個性をより磨き、より良い個性を生み出すのである。  
(※五字ヶ丘幼稚園 絵画制作の実践 NO.1 より)

## 2. 子どもたちが決めていくとは？

子どもたち自身が考え、決めていく点は大きく分けて5つあります。

### ◆5つの自由のものさし◆

#### ①何をするか(領域)

絵・立体表現・粘土・はり絵・その他(カッティング・版画・模様)

#### ②どんな主題にするか

「カプトムシ・お花・お母さんとお風呂に入っているところ」など

#### ③主題をどうとらえるか？

上から見る・下から見る・たくさん並べる・大きさを変えるなど

#### ④どんな材料・道具を使うか

あらゆるもの

#### ⑤どんな方法で表すか(種類)

例：版画ならスチレン・木・ゴム・モノタイプなど

旅行には国内旅行、海外旅行、宇宙旅行というようにスケールの違いがあるように、美術制作における自由度にも、スケールの大きさの違いがあります。上記の「5つの自由のものさし」を参考に考えます。

指導者による決め事が多いほど子どもの自由度は低くなります。例えば「今日はお母さんの絵を描きましょう。この画用紙にクレパスで描くのですよ～描き方は自由です」と指導者が言った場合、①絵②お母さん④クレパスと画用紙は決まっていますから、子どもの考える点は③と⑤だけになります。つまり③主題をどうとらえるかでは「お母さんがいつどこで何をしていて、どんな表情でどんな動きをしているのか、それをどう描くかを考

えます。⑤どんな方法で表すかでは、画用紙をぐしゃぐしゃにするとか、丸く切りぬくとか、描いたクレパスの線をこすってぼかし、その上から重ねて描いた後、硬いものでひっかいてみようかななどを考えるのです。

①～⑤の全てを子どもたちが自由に決めて制作していくことが望ましいと保育・教育界の誰もが分かっているのに、それができないのが実情です。その理由は2つあります。

1つめは、次々に溢れ出てくる子どもたちの発想やアイデアへの対応、技術指導することの大変さを指導者がよく知っているからです。突然「牛乳パックが欲しい」とか「空に飛ばしてみたい」などと言われても困るのです。筆の使い方や混色の仕方、版画印刷の仕方など複数のことを一斉に教えることは至難の技なのです。

2つめの理由は、「評価」の問題です。個々が好きな事を考えて、自分で決めていくことは素晴らしいことなのです。しかしそれでは完成したものが絵であったり、版画や粘土であったりするために、比較して評価ができません。ですから子どもたちへは①～⑤全てを任せず、指導者の決めた枠内での自由な制作を行っているのです。

## 3. 自分で決めるということ

では子どもが初めから①～⑤を自分で決めて制作を行なっていけるかということ、それは難しいと思います。ARTは自由であるけれども指導者は何もしないで子どもに「好きにしていよ」と言うだけではダメで、やはり参考になるものを与えてやらないといけません。

つまりこちら側から仕掛けてやらないとだめだということです。指導者は演出家であり仕掛け人です。子どもをその気にさせるためには課題してみたり、勇気づけたり、時には指導者自身が楽しく制作して見せたりとパフォーマーとなることも意識せねばなりません。

そして褒めること。見本となる作品ができたらみんなの前で褒めて壁に飾る。こうすることでこの子はさらに興味を持ちます。そして回りの子どもたちにとっても、いい刺激になるのです。



#### 4. 目標

することを自分で決め、新しいことを考え、とらわれることなく、工夫して、とことんまで制作に打ち込む態度を求めます。創造の精神は、このような態度から生まれるものと考えます。

#### 5. 内容

何をすればよいか、子どもが選びやすいようにたくさん示してあげます。絵・立体表現・粘土・はり絵・その他(カッティング・版画・模様)などをできるだけ多く見せ、一番やりたいことが選びやすいようにします。

#### 6. 指導

以下に示すようにマンネリになったり、人の真似ばかりになっているような時は、指導者が新しいものを指示し条件づけます。

- ・すること(領域)が固定化されてきた時
- ・主題が固定化した時
- ・主題とらえ方が固定化した時
- ・材料、道具が固定化した時
- ・方法が固定化した時

固定化していない面は子どもの自由にさせます。

#### 7. 環境の整理

子どもの心に望ましい刺激を与えるために、環境を整理して間接的に指導します。

##### ①子どもの生活経験をほりおこす工夫をする

(好きなこと・行事・家族・季節・体験・興味など)

##### ②鑑賞環境を新しくする

(紹介したい作品を目立つように展示する)

##### ③することや方法について理解できるような工夫をする

##### ④制作・表現しやすい場を工夫する

##### ⑤望ましい刺激が得られるような人的関係を考える。

##### <①子どもの生活経験をほりおこす工夫をする>

子どもたちの心情や感情にうまく働きかけるためには、できるだけその子のことを知ることが必要です。知ることはできなくても「あなたのことが先生はもっと知りたいの」という思いを持つことで、子どもたちは安心して色々なことを自分から話してくれるようになります。「子どもとの関係がまだできていないから無理」という人がいますが、そんなもの今からの語りかけや指導で作っていくものです。遠慮せず話をしていくうちに子どもの方から「好きなこと・行事・家族・季節・体験・興味」を話し出してくれるはずですよ。それが子どもの表現に自然と表出してきます。ですから子どもの表現には指導者と子どもの関係が大きく影響してきます。



↑興味を引くものを探る

##### <②鑑賞環境を新しくする>

お店のディスプレイでもそうですが、変化がないとお客も店員も飽きてきます。慣れると人は感情が働かなくなってしまう。特に表現の場においてこれは致命的なことです。ですから常に紹介したい作品を目立つように展示したり、新しい展示方法(宙に吊ってみたり、窓ガラスに貼って光を通してみる)を試みることを心掛けます。





↑参考となる作品を展示

<③することや方法について理解できるような工夫をする>

作品展示によって作品の種類や材料などは理解できますが、作り方や道具の使い方などを読み取ることは難しいかもしれません。年齢が上がるにつれマニュアルやレシピを読ませることで伝えることもできますが「百聞は一見に如かず」。実際に指導者がやって見せることが子どもたちのやる気に火をつけます。さらに理想的なのは、子どもが友達の制作を見て自分もやってみたいと思うことです。子どもは好奇心旺盛ですから自分が制作している間も友達が何をやっているか、しっかりと見ているものです。



↑ポタポタ装置を説明する

<④制作・表現しやすい場を工夫する>

大きな作品を床において描くと視野が狭くなり

ますから、できるだけ壁や大きな板に紙や布を貼り、画面の全体を見ながら制作させることが大切です。また水が大きく飛び散るような制作の場合は外で制作させるなど、遠慮せず思い切り表現に没頭できるような場を考えて用意します。さらに、水場や道具置き場、絵具置き場、子どもたちの動線も考えて一人一人の制作の場所を決定することを心がけます。



↑長さ8mの作品をほうきで描く

<⑤望ましい刺激が得られるような人的関係を考える。>

表現に遠慮の見られる子どもの隣には、あえて思い切り大胆に表現する子を配置します。また飽きっぽい子のそばには、根気強く続ける子を配置するなどして望ましい刺激が得られるような工夫をします。そうすることで制作に対する姿勢や雰囲気や集団が形成されていくこととなります。



↑スプレーペインティングに集中する2人

## 8. 振り返り

新しいことをする、工夫する、とらわれないようにする、とことんまでするという目標がどこまで守られているか指導者と一緒話しながら振り

返ります。また新しい領域や材料、やり方について簡単に指導者が説明し、新しい領域や表現方法を選んだ子どもの例やその過程を紹介し、次回への意欲を高め目標を持たせます。  
以上ここまでが指導の流れです。



くていいかもしれません。しかしそれは大人の都合であって、子どもの立場に立った考え方ではありません。大人の都合だけで「子どもたちの未来」に続くこの貴重な時期を過ごさせていいのでしょうか？それは木を見て森を見ていない愚かな行為です。楽しむ方法はひとつではありません。子どもたちが楽しみながら、自分の考えを持ち行動していけるように、私たち大人が環境や言動を考え続けていくことが大切であると考えます。

－ 2013. 3. 11 受稿、2013. 3. 19 受理－

## 9. おわりに

いろいろと述べてまいりましたが、大切なのは理屈や理想でなんかではなく「楽しむ」ということです。楽しむことは悪であるような捉え方をしている世の中ですが、そんなことはありません。私たち人間にとって「楽しむこと」は大切です。楽しいことは楽しいだけでは終わりません。楽しい時間の中には、緊張や挑戦、葛藤、失敗、変更、決定、実行、試行、成功、予想、発見、再挑戦、ハプニング、喜び、悔しさ、歯がゆさ、ひらめきなどがあります。そこから目には見えない様々なことを、私たちは感じ学んでいっているのです。

幼児期でも教室にきちんと座って黒板の文字を追いかけて、先生の言うことを黙って聞いている子どもの姿が素晴らしいと考えている大人が増えています。逆に一心不乱に筆のほうきを振りまわし、顔も体も絵の具だらけになって一カ所にじっとしていない子どもは、落ち着きがなく、みんなと同じことができない劣等生でしょうか？それは違います。自分の感情のままに感じ、考え、決定し、活動できることは素晴らしいことです。じっと椅子に座っている子は大人にとっては世話がかからな